

特集

コメント1

「菜の花プロジェクトについて」

藤井 絢子（NPO 法人 菜の花プロジェクトネットワーク）

菜の花プロジェクトネットワークの藤井です。NPO であちこち飛び回っていますが、たまたま4月に「チェルノブイリ菜の花プロジェクト」の現場に行ったことや、チェルノブイリ、福島、そして私たちがやってきた菜の花の人たちのネットワークを使いながら、何とか被災地に元気がつくれなかと考えて日々、動いております。

もともと菜の花プロジェクトというのは、今回の震災の有無にかかわらず、農村地域を含めて一次産業の地域では限界集落が大変多く、そうしたところで二十世紀型の経済成長ではなく、これからの日本を考えてベースの食とエネルギーの自立を図る構図をどうつくっていくかということをテーマにして活動してきました。

このスタートとなる滋賀県の琵琶湖の水再生から私は動いており、40年になりました。私自身は神奈川県生まれですが、藤沢から滋賀県に40年前に転居して来た際、滋賀県の方たちが、この原発銀座と県境の距離感をまったく意識していないことが大変不思議でした。敦賀の原発から県境まで13キロ、もんじゅから15キロという、大変な近さの中にありますのに、私自身は原発に代わる新しいエネルギーを、地域の自立したエネルギーとしてどのようにつくっていくかを皆と考えていくことを大きなテーマとして考えました。

そしてもう一つ、原発からの10キロ、20キロ圏内では琵琶湖の水源にかかり、琵琶湖はアウトになってしまいます。世界でも、一つの湖で1,400万人の水源地というのは琵琶湖しかありません。しかも、京都・大阪・兵庫の水源地でもあり、ここでもし敦賀の原発で福島第1原発のようなことがあれば3時間ぐらいで名古屋にもいってしまう距離です。つまり、日本の中心が全部分断されるというところに琵琶湖が位置しています。今、嘉田知事を中心にこの30キロ圏内を含めて、脱原発の形をどうつくっていくかということを議論しているところです。

もともとは地域住民を中心に「せっけん運動」として水再生の運動をやってきた私たちは、さらに1992年のリオデジャネイロのサミットの頃から、地球温暖化や生物多様性の問題が出てきた辺りで、身近にある廃食用油からバイオディーゼルをつくって化石燃料の代替にすることを大胆にも始めました。20年前に始め、大変苦勞致しましたが、今では全国でだいぶバイオディーゼル化が小さいながらも動き始めています。

今回の震災でいえば、このバイオディーゼルのやってきて本当によかったと思います。須賀川を含め各地域にバイオディーゼルのプラントがありますが、バイオディーゼルのプラントをもっていたところは、ガソリンスタンドが閉まってもごみ収集など全く不自由はなかった

のです。たまたま私の友人で自前の車にバイオディーゼルをつくる装置を付けているというフォトグラファーがいて、その彼が石巻で被災しました。彼のところに全国からどんどんバイオディーゼルの送り、まだ避難所にも行けないような方々を含めてずっと物資を届け続けています。つまり、バイオディーゼルが第2の化石代替エネルギーとして大変有効だということを、この被災で学んだところです。

もともと、菜の花を使った地域づくりをやろうと思ったのは、ドイツがヒントになりました。1973年の第一次オイルショックの時、すでにドイツは脱化石という視点を立てて、菜種にかなり着目をしていました。ドイツを含めてヨーロッパの国は三圃制の農業で、3分の1、3分の1、3分の1の農地をまわしながら、その輪作に菜種を植えています。もちろん食料にすることが第一義ですが、並行して、食べずに燃料にしてしまうというプロジェクトを1973年から行っているということを、20年近く経って知りました。

振り返って日本を見ると、食用油の自給率は10%未満、菜種は20年前は0.0001%という、まったく無いに等しい状態でした。ならば、私たちもいずれ、かつて日本にあったような菜種の作付面積を増やしながら、まず食べるというラインに乗せ、この廃食用油からバイオディーゼルをつくろうとしました。そして、ゆくゆくは耕作放棄地を含めて遊休地が相当出てくるので、耕作放棄地や減反対象のところにも植えて、食べるラインだけではなく、エネルギー作物という形でのラインもできればよい、ということで、この間取り組んできました。

チェルノブイリ原発が起きた1986年4月26日から、今年はちょうど25周年にあたります。実は、チェルノブイリに、NPOとしてかなり早くから入っているメンバーがいます。それは愛知にあるチェルノブイリ救援・中部というチームです。1990年からチェルノブイリに入り、当初は物資の支援や医療支援、クリスマスカードを送るといったことを行っていましたが、2006年から、ウクライナの大地を農地として再生して手渡していくということに取り組まなければいけないのではないかということに気づき、2007年から「チェルノブイリ菜の花プロジェクト」を始めました。

ウクライナの化石燃料は大変高価だということで、牛馬を使ったりもしていますが、広大な面積で何としてもエネルギーが必要となります。ならば、この原発被災地ですくった菜種油をバイオディーゼルとして使おうというプログラムを立てたのが、この「チェルノブイリ菜の花プロジェクト」です。

私は4月に行きましたが、その前に京大の原子炉研の今中さんから原発被災地の汚染数字が発表になったことを知りました。そして、そのすぐ後に私の友人の依頼で被災地に入り、今中さんから、新聞報道とは違う、今実際はこういう状況だということを伝えていただきました。いかに市民、私たちがこの時点で正確な数字を握っていなかったか、ということをお願いされました。住んでいる方たちにすれば、自分たちがどういう地域にいるのかということすら、全くつかめないということです。

つい最近、福島県の庄野というところの農家の方が、たまたま私のNHKラジオ深夜便を聞

いたり、『チェルノブイリの菜の花畑から』を読んだ後、実は福島市内の地域の中で、何とセシウム134と137が合計113万7,398ベクレルに達している、ということ連絡してくれました。これは9月に文科省から発表になりました。

チェルノブイリは55.5万ベクレル以上が避難地域でしたが、自分たちの住んでいるところは逆に113万ベクレルということです。いったいこの国は人の命をどう考えているのかということメールで、手紙で私に訴え続けました。

私にどの位のことができるかわからないが、まず「チェルノブイリ菜の花プロジェクト」ではどこまで状況が分かっているのか、ということで、篠原農水副大臣や農水省の土壌の専門家と一緒に出掛けました。チェルノブイリに行く前、日本にはまだ放射性物資に関する食品の基準の数値がありませんでした。急きょつくられました。ウクライナはすでにいろいろな改定をしながら、1997年に数値を出しています。

まず、現地でウクライナの基準に学ぼうという指導を受けました。ただ、食べるものがパンよりも米食であったり、魚食の多い日本では、ウクライナ基準の数値ではとても内部被ばくに耐えられないだろうということで数字の見直しを急ぐようにとも言われました。未だにこのままです。ようやくこの前、赤ちゃんのところで新たな数値が幾つか出てきましたが、いずれにしてもチェルノブイリで時間をかけて様々なデータが出ているのにもかかわらず、まったく活きていないというのが現状です。

菜種ですが、チェルノブイリ救援・中部のメンバーはどういう植物がどのように吸うかということ現地研究者と共同でいろいろと調べました。その中で菜種が大変セシウムを吸うという性質を利用しようということになったそうです。

チェルノブイリでは、30キロ圏内はいまも原則的には人が住んでいません。そうした中で福島を思うと、1ミリシーベルト以上のところは国が全部責任を持って除染して帰れるようにする、ということを政府は言い続けてよいのかということに、大変疑問を持ちながら30キロ圏内を歩いてみました。

菜種に話題を戻します。チェルノブイリのメンバーは、まず本当に吸うかということと同時に、油にセシウムなどが行くかを見てきました。実際にいまの発表の中で出てきましたが、セシウムなどは土壌に吸着していて、雨で少しずつ溶けていったものを菜種が吸うという構造です。全体の浄化力という数値的に少ないのですが、吸った後、このセシウムが土壌から離れるまでの期間は食べられる大麦や何かを育てる。そこにはセシウムがいかないで、ここでは吸着能力と同時に、次の作物は食べられるというところを三年輪作で実証してきました。

油にはセシウムはいきません。ただ、油かすや殻にはいくので、この地域は畜産糞尿など原料のバイオガスの装置をつくりました。ところがまだ液肥の中に残ります。液肥はいま福島原発でもやっているように、様々な吸着材を実験した中で、ゼオライトが一番効果があるということです。そこで、ゼオライトでセシウムを吸着させて、低レベル固体廃棄物として管理し、その後の液肥にはセシウムは無いのでそのまま農地で液肥として使います。

このチャート図（チェルノブイリ菜の花プロジェクトのしくみ）が全て昨年9月時点で循環が完成しました。それまではまだバイオガスが発生していませんでしたが、去年秋に見事に循環しはじめたのです。日本はなかなかこういう経験を利用していません。

そして、私自身も5年前からチェルノブイリ菜の花プロジェクトから情報をいただきながら、どうしても信じ難く、油にセシウムはゼロですかということをたびたび質問しました。京大でまったく違うチームの会合があったときにも、農学部先生に「藤井さん、これは眉唾やで」と言われて、本当に油にセシウムがいかないというのが不思議だなと思い、現地で確認しました。そして、確かに油にはセシウムがいないということが分かりました。

チェルノブイリ菜の花プロジェクトの現場は大変小さなプラントですが、逆に言えばこうした実証実験も様々な地域でやったらどうかと思います。これは畜産糞尿と先ほどの菜種しほりかすを使った実験ですが、中国の四川といったかなり奥地の地域では、自分の家の横にこうしたバイオガスの5立方メートルとか8立方メートルぐらいのをもって、自分たちの煮炊きもやっていると聞いています。言ってみればエネルギーの自給の一番コアなものをもう少し他の地域に広げていけば地域の自前のエネルギーになるということを学びました。

4月、当時篠原孝さんが農水副大臣でした。実はこの方が2001年にスタートしている超党派の国会議員連盟の菜の花議員連盟会長でした。一緒にチェルノブイリの菜の花プロジェクトの現場に行きました。チェルノブイリ4号炉から70キロ地点のナロジチという地域です。この後、7月にこの州政府も動いて、いよいよNPOで小さくやってきたプロジェクトを、全部この現場が受けて30万ヘクタールでやるということになりました。18ヘクタールから30万ヘクタールというのは大丈夫かなと思いますが、大きく動き始めました。

以下パワーポイントを見ながら説明します。

これが向こうの農業大学のカウンターパートナーです。土壌の性質も日本とまったく違いますし、日本はまだ表面にあるのに対し、向こうは25年経って20センチから25センチぐらいに潜っている、という違いもあります。これをどうするか、日本は日本でデータを初年度から集めなければいけないということを、きつく言われました。

この周りにいるのは日本の農水省の技術会議の土壌の専門家のメンバーですが、あまりメディアで発表されていませんので、いま何をしているのか聞いてみないといけません。福島を含めて、日本の土壌の状況をどのように被災地の方々に伝えているのかが見えません。

30キロ圏内まで人が住めないという、被災地に住んでいらっしゃる方たちには大変むごいと思いつつ、本当に1ミリシーベルト以上のところは全部除染をして、農地も全て戻すということとは、時間とお金の問題も含めまったく不可能ではないかと、私自身は思っています。

帰れないとなれば、その地域はコミュニティーの移転を含めて、大きな問題を抱えるでしょうが、チェルノブイリの場合は多くの村々、住めないという村々に赤線でマークが付いていました。

これは4月26日に、チェルノブイリ25周年のときの新聞に出ていたものですが、だいたい、

いま日本の現場も植物、昆虫を含めて、生態系の調査がどれぐらい行われているか、よく分かりません。4、5年経つと、人間だけでなくいろいろなものに影響が出てきます。カメモシヤマツの葉など、いろいろな実験があることを見てきました。

これはチェルノブイリの博物館で学習している子どもたちですが、福島事故が起きなければ、このチェルノブイリ博物館も開店休業のような状態だったそうです。しかし、福島のこと起きてから、本当に子どもたちも、世界からも、チェルノブイリ博物館に視察に来ていたということでした。

事故処理に当たっていた人たちにもずいぶん会いましたが、この方たちは、日本の不織布のようなものと全く違う防護服を着ていました。

ここは30キロ圏内の様子です。これは30キロ圏内には、全部このように放置された船とか、戦車とかがあります。

それから、特に森とか農地は全面的に除染するということはしませんでした。それ以外の住宅地などで行ったものは30キロ圏内に入れて土をかぶせ、ここには近寄るなというマークが付いているところが、ずいぶんたくさんありました。

これは4号炉です。4号炉の後ろ側のところで、いま、事故直後につくった石棺を覆うためのドームをつくっています。ドーム製造に日本円で2,200億円かかるといっていましたが、かぶせてそこから廃炉にかかる。どれぐらいかかると予測していますかと聞くと100年とおっしゃいました。日本は30年で廃炉できるといっています。

これは事故処理にあたった消防士たちです。地域の隊長さんは、4月に訪問した時、福島の現場の事故処理の方々はどうしていますかと、たびたび聞かれました。4月の時点で、福島の事故処理の現場でどれだけの人がどのように働いているかということ、私たちはメディアを通してほとんど知ることがありませんでした。今もつぶさに知ることはありません。あれから25年経ち、ほとんどの方が血液系の病気を抱えていらっしやいます。この方も、がんです。

最後に、日本に戻ります。福島の現場で菜種をまこうということを始めました。もともと須賀川は40町歩も菜種をまいていたところですが、かなり線量の高いところもあり、現地の人たちは今年は菜の花をやめようかとおっしゃっていましたが、しかし地域の再生のために元気が欲しいということで電話がかかってきて、やはりまくというので、1泊4日の弾丸バスツアーで滋賀からタネまきボランティアが行きました。

いわきも、幸いに来年の4月28、29日と、須賀川で「第12回全国菜の花サミット」を開催することになりました。全国の方たちに、とにかくフクシマを忘れないでということで、（北海道から沖縄まで菜の花プロジェクトのチームがいま160ぐらいありますが）プロジェクトメンバーを中心に声を掛けて、4月に福島県須賀川に大集合すべく準備しています。

今月もまた福島に行こうと思いますが、種をまいて、少しずつ芽が出てくると、元気が出てきて、今こんなになったよという報告が来ています。いわきではいわき明星大学の先生がいろ

いろとデータを取ってくださって、土壌と植物にどのくらい放射性物質を吸っているかということも並行して調べています。

大変、長くなりました。ありがとうございました。